或黄昏

久しぶりに夕日を浴びて自分の街に帰ると
家々の間の狭い路地には心地良く
生活の匂いがそこら中に満ち満ちて
雨戸を閉める音さえも香りがする

紅い情熱も溶けて失せる、そんな空気と
ふうわりと顔を撫でる、漂うような温もりと
人の歩みを妨げぬ、重さのない光と
そして、無に帰されようとするあの傷跡と

傍観の涙に何の幸福
知の抱擁に何の存在
ただ‘そうであること’のみが
哀しみそのものであり、哀しみを感じない

(1982.10.19)